

セレナーデ ニ長調「ポストホルンセレナーデ」 K320

武本 浩

1783年3月23日、ブルク劇場において皇帝ヨーゼフ2世の御前演奏会が行われた。3月29日、ウィーンに住むモーツァルトからザルツブルクの父にあてた手紙でこの演奏会の模様が伝えられている。

親愛なお父さん！

ぼくの演奏会の成功について、あれこれ語るまでもないと思います。たぶん、もう評判をお聞きになったことでしょう。要するに、劇場はもう立錐の余地がないほどで、どの座席も満員でした。(中略) なにしる、皇帝の御満足は際限がなかったのですから。25 ドッカーテンを賜りました。

曲目は次の通りでした。

- 1 新ハフナーシンフォニー
- 2 ぼくのミュンヘンのオペラから、4つの楽器伴奏による、ランゲ夫人の歌うアリア「もし私が父上を失い」
- 3 ぼくの予約演奏会の協奏曲から、第3番をぼくの演奏で
- 4 アーダムベルガーの歌う、バウムガルテンのための劇唱
- 5 ぼくの最近のフィナーレムジークから、小コンチェルトシンフォニー
- 6 当地で好まれている『ニ長調協奏曲』を僕が演奏。これに『変奏曲ロンド』をつけました。
- 7 ぼくの最後のミラノのオペラから、タイバー嬢の歌う「私は行きます、急いで」
- 8 ぼくの独奏で小さなフーガ(皇帝がいたので)と、『哲学者たち』というオペラのアリアによる変奏曲—これはもう一度アンコールしなくてはなりませんでした。それに『メッカの巡礼たち』から「愚民の思うは」の主題による変奏曲
- 9 ランゲ夫人の歌で、ぼくの作曲による新しいロンド
- 10 最初のハフナーシンフォニーの終楽章

これを今風のプログラムに書き直すと次のようになる。

- 1 交響曲第35番ニ長調『第2ハフナー交響曲』K385(1783年)より第1楽章～第3楽章
- 2 『クレータの王イドメーネオ』K366(1780年)より第11曲、イーリアのアリア「たとえ父や祖国や安らぎを失ったとしても」
- 3 クラヴィーア協奏曲第13番ハ長調K415(387b)(1782/3年)
- 4 レチタティーヴォとアリアK369(1781年)「憐れな私よ、ここはどこなの?—ああ、語っているのは私ではないの」
- 5 セレナーデニ長調『ポストホルンセレナーデ』K320(1779年)より第3楽章と第4楽章を抜粋した、2本のフルート、2本のオーボエ、2本のファゴットのための協奏交響曲
- 6 クラヴィーア協奏曲第5番ニ長調K175(1777/8年)の第1楽章、第2楽章と新作の第3楽章「ロンド」ニ長調K382(1782年)
- 7 『ルーチョ・シッラ』K135(1772年)第16曲、ジュニアのアリア「私は行く、私は急ぐ」
- 8 小さなフーガは不明であるが、即興演奏だと思われる。ジョヴァンニ・パイシェッロのオペラ『哲学気取り、または星占いたち』の「主よ、幸いあれ」による6つの変奏曲へ長調K398(416e)(1783年) クリストフ・ヴィルバルト・グルックの『メッカの巡礼たち』のアリエッタ「愚民の思うは」による10の変奏曲へ長調K455(1781/3年)
- 9 レチタティーヴォとロンドK416(1783年)「わが憧れの希望よ!—ああ、おまえは知らないのだ、その苦しみがどんなものか」
- 10 交響曲第35番ニ長調『第2ハフナー交響曲』K385(1783年)より第4楽章

この演奏会の第 5 曲目に演奏された、「ぼくの最近のフィナールムジークから、小コンチェルタントシンフォニー」は、本日演奏会で取り上げるポストホルンセレナーデから抜粋されたものであるとされている。ケッヘルカタログには、出版社の J.アンドレがモーツァルトの自筆による 2 楽章の「シンフォニア・コンチェルタンテ」を所有していたと記載されていることから、ザルツブルクから取り寄せたポストホルンセレナーデから 2 つの協奏的楽章をモーツァルト自身が筆写して独立した楽曲に仕立て直したのであろう。

1784 年 6 月 9 日に、ウィーンに住むモーツァルトからザルツブルクの父にあてた手紙の中で、

それから、(6 曲のうち) 3 曲のシンフォニーを版刻に渡します。これはフォン・フェルステンベルク公爵に献呈することになるでしょう。

と述べているが、実際に 1785 年にアルターリアから出版され、2 年後にフォン・フェルステンベルク公爵に献呈されたのは、交響曲第 33 番変ロ長調 K319 と交響曲第 35 番ニ長調「第二ハフナー交響曲」K385 の 2 曲で、献呈するつもりだったもう 1 曲は交響曲第 34 番ハ長調 K334 と考えられている。この手紙で言及されている残りの 3 曲は、交響曲第 36 番ハ長調「リンツ」K425、セレナーデニ長調 K250(248b)「ハフナーセレナーデ」から 5 つの楽章(第 1、第 5~第 8 楽章)を抜粋した交響曲「第 1 ハフナー交響曲」、セレナーデニ長調 K320「ポストホルンセレナーデ」から 3 つの楽章(第 1、第 5、第 7 楽章)を抜粋した交響曲と考えられている。この交響曲版は、モーツァルトの死後 1792 年、オッフエンバッハの J.アンドレより出版された。それに先立ち、1790 年、ピアノ、ヴァイオリン、チェロの編成で編曲された交響曲版(K Anh. B. Zu320、第 1、第 5、第 6、第 7 楽章)がロンドンの 2 つの出版社から出版されている。

この交響曲の手稿パート譜がウィーンのオーストリア国立図書館に保存されている。その内容は、第一ヴァイオリン 3 部、第二ヴァイオリン 3 部、ヴィオラ 2 部、低弦 3 部、2 本のオーボエ、2 本のファゴット、2 本のホルン、2 本のトランペット、ティンパニのほかに、オーボエと同じ楽譜の 2 本のクラリネットのパート譜(第 1 楽章と終楽章のみ)とオーボエと同じ楽譜の 2 本のフルートのパート譜(終楽章のみ)となっている。1783 年 3 月 23 日に演奏された「第 2 ハフナー交響曲」のようにクラリネットやフルートを追加したことを示すこの資料は極めて興味深いものである。しかし、1792 年に J.アンドレより出版された印刷パート譜は、2 本のオーボエ、2 本のファゴット、2 本のホルン、2 本のトランペット、ティンパニと弦楽器の構成で、オリジナルのセレナーデと同じ楽器編成になっていることから、クラリネットやフルートはモーツァルトの死後、追加されたのかもしれない。手稿パート譜はオリジナルのセレナーデに準じているのに対して、印刷パート譜は、例えばティンパニはかなり効果的に編曲されており、これはモーツァルトによるものだと考えられている。ちなみにハフナーセレナーデ K250(248b)から抜粋された交響曲「第 1 ハフナー交響曲」もモーツァルトの筆跡でティンパニが追加されている。

モーツァルトの最初の伝記作家であるフランツ・クサヴァー・ニーメチェックは、1799 年 5 月 27 日、出版社のブライトコプフ・ウント・ヘルテルに宛てた手紙の中で、この曲が大司教の霊名の祝日のために書かれたとしているが、ヒエロニムス・コロレドの霊名の祝日は 9 月 30 日であり、この曲の作曲された日(1779 年 8 月 3 日)からみて、モーツァルトがそんなに早く曲を仕上げたとは思えず、これには疑義を唱える研究者も多い。新モーツァルト全集などでは、ザルツブルク大学の学生たちが専門課程に進む前に、2 年間の教養課程の最終試験終了後に大司教と教授たちへ感謝をこめて演奏される、フィナールムジーク(卒業演奏)のために作曲されたとしている。フィナールムジークは、まず、大司教の夏の住居であるミラベル宮殿で大司教のために感謝をこめて演奏され、その後、行進曲を演奏しながら大学に向かい、大学付属のコレギアン教会の広場で教授たちのために演奏された。毎木曜日は大学の休日であったため、この行事は毎年 8 月初旬の水曜日に行われていた。ちなみに 1779 年 8 月 3 日は火曜日なので、この行事の前日に曲が仕上がったのではないかとと思われる。

1779年9月24日の姉マリーア・アンナ（ナンネル）の日記帳によると、その日は自宅でコンサートの練習があり、その後、カテルルのところに行ったと記載されているが、モーツァルトの筆跡で、次のように追記されている。

そこにメツゲル家の人たちが居合わせる。11時半、トランプで遊ぶ。4時、パパと弟が来る。5時、私たちみんなでメツゲル家へ。九柱戯をする。9時、大学広場のデー氏（マンハイム訪問時以来の旧知）のところ。路上でナハトムジーク（夜想曲）。最新のフィナルムジークから行進曲。シュヴァーベン民謡は陽気。そしてハフナムジーク。

ここで述べられている行進曲はフィナルムジークの前後に演奏されるもので、「最新の」とあることから、このフィナルムジークはポストホルンセレナーデであると考えられている。ベルリンのドイツ国立図書館所蔵のポストホルンセレナーデの自筆譜に別紙として一緒に保管されている行進曲がある。別紙に追加された行進曲 K335(320a)は2つあり、第1曲が、2本のオーボエ、2本のホルン、2本のトランペットに弦楽器、第2曲が、2本のフルート、2本のホルン、2本のトランペットに弦楽器という編成で、いずれもポストホルンセレナーデと同じニ長調で作曲されているが、編成が異なっている。ティンパニのパートがないのは、10段しかない総譜にはティンパニの楽譜を書き入れるスペースがなかったため、当時の習慣では、別紙に記載するか、実際の演奏に当たっては第二トランペットと同じ（1オクターヴ下の）楽譜を使用した。これら行進曲には作曲の日付がないので、いずれの行進曲がポストホルンセレナーデのための行進曲なのか定かではないが、モーツァルトはフィナルムジークの前後に異なる行進曲を作曲した例は無く、これらの2曲に関連性がない可能性もある。ナンネルの日記に記載されているように、シュヴァーベン民謡が挿入されているほうの行進曲が、間違いなくポストホルンセレナーデのために作曲された行進曲であることは言える。シュヴァーベン地方は、モーツァルトの父レオポルトの出身地で、シュヴァーベン民謡はモーツァルト一家には馴染み深いものであった。1774年、ハイドンはエステルハージの劇場でヴァール一座が「うっかり者」という演目でコメディを演じるために付随音楽を作曲したが、翌年これを全6楽章の交響曲（交響曲第60番 ハ長調 Hob.I:60）としてプレスベルクで演奏した。A. レイバーンは1776年にザルツブルクを訪れた演劇一座によるこの曲の演奏をモーツァルトは聴いたとし、大司教への反発とも思えるユーモアに富むポストホルンセレナーデの作曲に影響を及ぼしたと推定している。

第1楽章 ニ長調 Adagio maestoso - Allegro con spirito

Adagio maestosoの序奏で始まり、Allegro con spiritoに移行する。マンハイム・パリ旅行（1777年9月23日～1779年1月）から帰宅したばかりのモーツァルトは早速、マンハイム・クレッシェンドを使用している。曲の後半で6小節の序奏部が12小節で再現されることから、AdagioのテンポはAllegroの半分の速さで演奏しなければならないことが分かる。もともとMolto Allegroのテンポ表示であったが、モーツァルト自身により修正されていることは大変興味深い。

第2楽章 ニ長調 MENUETTO: Allegretto

メヌエット、イ長調のトリオではフルートとファゴットが農夫の踊りを表現する。

第3楽章 ト長調 CONCERTANTE: Andante grazioso

第4楽章 ト長調 RONDEAU: Allegro ma non troppo - Adagio - Allegro

2本のフルート、2本のオーボエ、2本のファゴットのための2楽章からなるコンチェルタンテ、ロンダはもともとAllegrettoのテンポ表示だった。1778年、モーツァルトがパリで作曲したフルート、オーボエ、ファゴット、ホルンのためのシンフォニア・コンチェルタンテ K. Anh.9 (297B)は残念ながら散逸してしまったが、この曲を連想させる。

第5楽章 ニ短調 Andantino

J. アン Dre が出版したモーツァルト作品のカタログには、オペラや演劇の幕と幕の間の休息を意味する「幕間」であると紹介している。

第6楽章 ニ長調 MENUETTO

ニ長調の第1トリオとイ長調の第2トリオを持ったメヌエット。第1トリオにはフラウティーンとの楽器指定があるが、この譜段は空白になっている。そのため、旧モーツァルト全集は空白のまま出版したが、新モーツァルト全集では、第1ヴァイオリンの2オクターヴ上の音符が記載されている。通常ピッコロで演奏されることが多いこのフラウティーンという楽器であるが、ヴィヴァルディの協奏曲などでも登場するように、ソプラニーノリコーダーを指している。フラウティーンは、モーツァルトが作曲した舞曲（K536、567、568）にも使用されているが、フラウトピッコロという楽器指定の舞曲（K509、535、571、585、586、599、600、601、602、603、605）もある。オペラ「後宮からの脱走」K384でもG管のフラウトピッコロが使われているが、トランペット、ティンパニ、トライアングル、シンバル、大太鼓を含んだフルオーケストラの中で演奏することを考えると、リコーダーで演奏することは困難である。トルコ風の舞曲 K571 では、トランペット、ティンパニ、シンバルと小太鼓が楽器編成に含まれており、これも同様である。従って、フラウトピッコロは現代のピッコロと同じ楽器で演奏されたものと思われる。しかし、フラウティーンとフラウトピッコロの楽器指定は、実際のところ、どの楽器で演奏されたのか、不明な点も多い。舞曲のトリオで、ヴァイオリンの2オクターヴ上をユニゾンで演奏するフラウトピッコロ（K585、586、599、600、601）は、リコーダーで演奏された可能性も考えられるのではないかと思う。第2トリオには、このセレナーデが後年付けられた愛称の由来になったポストホルン（郵便ラッパ）が使用されている。ポストホルンは、当時、郵便馬車はその到着を知らせるために使われた。第1トリオは、フラウティーン、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、低弦の編成で作曲されている。第2トリオの編成も、ポストホルン、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、低弦であるが、第2トリオには Viola col Basso との表示がある。そのため、旧モーツァルト全集では第2トリオのみヴィオラが追加されていたが、新モーツァルト全集では第1トリオにもヴィオラが追加された。モーツァルトの舞曲にはヴィオラのパートが無い曲が多いが、Viola col Basso、すなわち低弦と同じ楽譜で1オクターヴ上を演奏するのが当時の演奏習慣だったのかもしれない。また、繰り返し記号には1番括弧と2番括弧が省略無く全てつけられており、コーダの書き方から、当時のメヌエットの演奏法が分かる。

第7楽章 ニ長調 FINALE: Presto

モーツァルトが使用した最速のテンポ、アラ・ブレーベ（2分の2拍子）のプレストで華やかに曲を閉じる。

参考文献

Walter Senn: Mozart, Serenade in D („Posthorn-Serenade“) KV320, Bärenreiter (1980)

Günter Haußwald: Mozart, Sinfonie in D nach der Serenade KV320, Bärenreiter (1958)

Christa Landon: Mozart, Serenade and 2 Marches for Orchestra D major / D-Dur / Ré majeur K 320 and 335 (320a), „Posthorn-Serenade“, Ernst Eulenburg (1960)

Marius Flothuis: Mozart, Tänze und Märsche, Bärenreiter (1988)

Alfred Einstein (A. Mendel, N. Broder translation): Mozart, his character, his work, Cassell (1946)

Neal Zaslaw, William Cowdery: The Complete Mozart, A Guide to the Musical Works of Wolfgang Amadeus Mozart, Norton (1990)

Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies, Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989)

Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts, Breitkopf & Härtel (1983)

海老沢敏、高橋英郎：モーツァルト書簡全集 IV、白水社（1990年）

海老沢敏、高橋英郎：モーツァルト書簡全集 V、白水社（1995年）